粟国家における旧暦３月３日の祈願祭

新垣則子、佐藤宣子、本永　清

Ⅰ．宮古島市平良字西里の粟国家では、ご自宅で特別のご神体を祀っており、毎年旧暦３月３日には、平良市内から各御嶽の神役や、民間で活躍するトゥキ（シャーマン）たちが、そのご神体を拝みに訪れる。旧暦３月３日の祈願祭ということになろう。（写真①）

写真①　神棚へ向かって拝む

粟国家がご神体を祀る理由については明らかでないが、同家は先祖代々、漲水御嶽の神女ツカサを占有的に出しており、特別の家筋であることは注目してよかろう。申すまでもないことだが、漲水御嶽の現ツカサを務めるのも粟国家の奥様である。

今年（2014 年）はそのご神体を拝む日が新暦４月２日に当たっていた。私たち３名は当日、粟国家を訪問して、その祈願祭の模様を観察・記録した。本報告はその時の調査結果である。

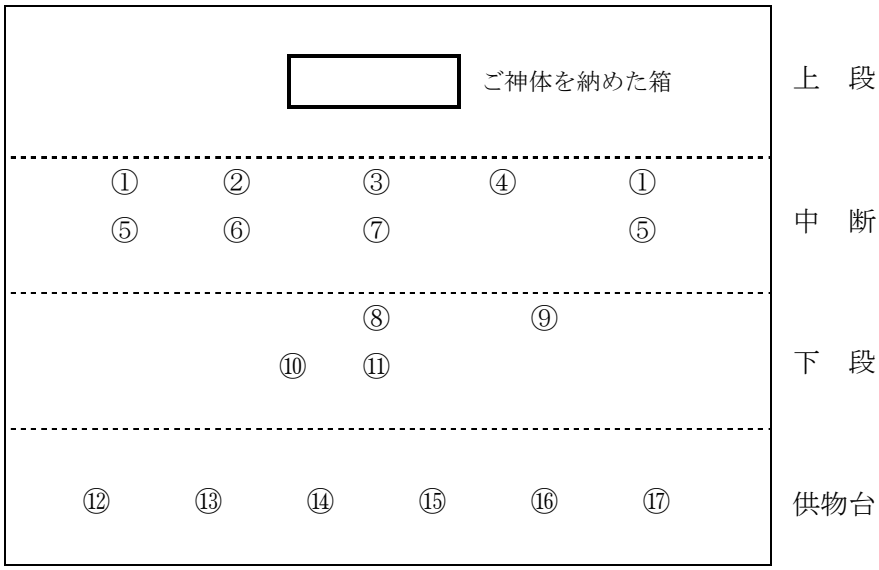
Ⅱ．私たちは当日、午前 10 時には粟国家を訪問した。数日前に奥様と連絡を取って約束していたからである。参拝者はまだ誰も来てなかったが、奥様のお勧めで、ご神体のある部屋に先にあがらせてもらった。部屋の座席は 10 畳ほどの広さで、西壁に接して東向きに神棚が設けてあった。神棚は上下３段から成っていて、上段に小さな木箱が安置してあった。その木箱の中に、ご神体が納めてあるはずである。もちろん、ご神体が何であるかは、一般の人々には公開されていない。

神棚にはすでに、供物やいろいろなものが飾ってあった。中段の両端に、花瓶が 1 個ずつ置いてあり、中に植物トラノオが挿してあった。神の依り代ということであろう。中段には、上段のご神体を背後に、今年の干支を表す馬の小像も置いてあった。供物は、水、酒、お茶、塩がそれぞれ容器に入れて、一定の順序で飾ってあった。

神棚の下段には、陶器製香炉を中央に安置し、その向かって右側にみかんが飾ってあった。香炉の前には、海水を入れたコップが置かれていた。海水は、奥様が前日、

写真②　神棚の供物

図　神棚の上の供物・祭具の配置



①花瓶＋植物トラノオ　②枡
③水　④干支の馬
⑤お茶　⑥塩
⑦酒　⑧香炉
⑨みかん　⑩お菓子
⑪海水　⑫砂糖てんぷら
⑬そうめんの吸い物　⑭落花生の豆腐
⑮野菜の和え物　⑯赤飯
⑰芋てんぷら＋アーサ入りてんぷら

西辺集落の北海岸真謝から汲んできて飾ったということであった。海水コップの左側に、お菓子も供えてあった。

神棚には、前方に供物台が付設してあり、その上に手料理がいろいろ供えてあった。砂糖天ぷら、落花生の豆腐、野菜の和え物、そうめんの吸い物、赤飯、芋天ぷら、海草アーサ（一重草）入り天ぷらの計 7 品が、これもそれぞれ容器に入れて、一定の順序で飾ってあった。（写真②、図）

Ⅲ．私たちが部屋に入って座卓を前にして座ると、奥様がまず、神棚の上の香炉に平香を 1 枚焚いた。後でわかったことが、これはご神体への案内香であった。

私たちは、ご神体への供物として、市史編さん室から持参した「さんぴん茶」を 1 ケース差し出した。奥様はそれを受け取り、ケースを開けると中から 6 缶取り出して、神棚にお供えした。1 人 2 缶ずつ、お供えしたということであろう。それから奥様は、香炉に平香を 2 枚ずつ 3 回焚くと、私たち一人一人の干支を訊いてそのことを神様にお告げしてから、何か神言を唱えて私たちのために祈願してくれた。私たちも自席で身を正すと手を合わせて拝んだ。

祈願が終わると、粟国家のお嫁さんとそのお嬢さんの手で、料理が一膳、私たちの前に運ばれてきた。赤飯 1 碗、素麺の吸い物 1 碗、野菜の和え物 1 皿、落花生の豆腐 1 皿、砂糖天ぷら 2 個、芋天ぷら 2 個、アーサ入り天ぷら 1 個、じつに盛りだくさんの料理が、私たちの前に置かれた。私たちは奥様をはじめ、家族の皆さんに感謝の念を述べて、その料理をご馳走になった。ところで、料理は、よく観察すると神棚の供物台に飾った供物と同じ内容である。畑の作物と海からの贈り物、これを食材としたものだが、今日のような場では豚や牛など獣肉入りの料理は禁忌であると奥様は話しておられた。（写真③）

写真③　膳の物

Ⅳ．午前 10 時 50 分頃、最初の参拝者が声をかけて、戸口から現れた。私たちも顔見知りの女性であった。彼女は昨年、漲水御嶽のユークイ祭祀の時、下里内会の神女ツカサのお供役を務めていた。それで知った。彼女は座席に上がると、奥さまと一言二言、何やら言葉を交わしてから、まっすぐ神棚の前へ進んだ。奥様が横から平香を差し出すと、彼女はその平香を受け取って香炉に焚いた。平香は 6 枚であった。それか

らお賽銭も神棚に供えた。彼女は神棚の前で正座し、しばらく身動きもしないでいたが、突然高らかに神歌を歌い出した。しかし、急なことで、私たちはその神歌を録音することは出来なかった。おそらく自作の神歌であろう。神歌を歌い終わると、彼女は小声で、何か少し神言を唱えてから、今度は宮古の祝歌「トーガニアヤグ」を歌って、その祈願を終えた。

写真④　座卓を囲む

奥様がゆっくりしていくよう、彼女に勧めた。彼女は、私たちの側に来て、並んで坐った。彼女の前にも、私たちと同様、ご馳走が一膳運ばれた。彼女の話では、奥様から連絡を受けて、数年ぶりに粟国家へ参拝に来たということだった。

Ⅴ．同 11 時頃、2 人目の女性参拝者が訪れた。彼女も私たちの顔見知りで、漲水御嶽のユークイ祭祀の時、下里のツカサのお手伝いをしていた。彼女は、神棚の前まで進み、奥様から平香を 2 枚受け取って香炉に焚くと、お賽銭を置いてから、小声で何か神言を唱えて祈願した。それだけであった。彼女はその後、私たちと座卓を挟んで席に着いた。彼女の前にも、ご馳走が一膳運ばれた。

Ⅵ．同 11 時 5 分頃、宮古で名の知られた女性トゥキ（前出）が参拝に訪れた。中年の男性 1 人を連れていた。彼女の説明では、その男性は自分の「弟子」ということだった。トゥキは、奥様から平香を 6 枚受け取ると香炉に焚き、お賽銭を置いてから、神棚の前に正座して、神歌を高らかに歌い出した。これもおそらく自作であろう。歌い終わると、何か神言を唱えて、その祈願を終えた。連れの男性は、座卓を前に坐り、その席で神棚へ向かって手を合わせて拝んだ。2 人の前にも、ご馳走が一膳ずつ運ばれた。食事しながら聞くと、2 人はこれから八重干瀬へ参拝に行くところであり、その途中で粟国家へ立ち寄ったとのことであった。八重干瀬とは、池間島の北方に位置するサンゴ礁群で、国内最大のものである。（写真④）

Ⅶ．奥様の話では、今日はこれからも、多くの方々が参拝に訪れるということであった。ゆっくりしていきなさいと奥様は、私たちに言われた。しかし、他家の特別の日に、第三者が長居するのは悪かろうと考えて、私たちは粟国家を辞することにした。帰り際に、私たちの食べ残したてんぷらを奥様がビニール袋に入れて、お土産に持た

せてくれた。

Ⅷ. 午後 11 時 30 分頃、私たちは奥様にお礼の言葉を述べて、粟国家を後にしたが、奥様から当日、断片的に聞いた話もあるので、それを記しておく。

① ご神体を祀る部屋には、平素は奥様以外、家族の者も立ち入らない。自宅が瓦屋根であった頃から、これは厳重に守られている。
② 旧暦の毎月 1 日、15 日には、奥様が部屋の中に入って清掃してから、ご神体を拝む。
③ 漲水御嶽の祭祀の時は、奥様はご神体を拝んでから出かける。帰宅してからも、ご神体を拝む。
④ 他所の者がご神体を祀る部屋を出入りする時は、必ず外側の戸口を利用する。
⑤ 漲水御嶽の祭祀では、神前に獣肉料理を供えない。ただし、野菜料理の中に、出汁のつもりで豚の細切れを入れることはある。
⑥ 神女には、身につけた霊力の高低があるという。それは香炉に焚く平香の数によって表される。

（文責：本永清）